研究ノート

島田蕃根　小伝

会員　小林省三

はじめに

島田蕃根は、幕末期から明治期の政界・宗教界などで活躍した近世の碩学である。蕃根は維新前に徳山藩命により形勢視察使に任用され、毎年一回京坂地方に出張り、藩のために尽くした。徳山藩内訌後は徳山藩政務座に起用され、王政復古後には徳山藩權大参事を勤めた。また、廃藩置県後は上京し、明治政府の教部省等に出仕し、大いに活躍した。しかし、現在の周南市（徳山）では、島田蕃根の知名度は極めて低い。

本稿は、未だ十分な調査はできていないが、特に正確を期するため根本史料の調査に留意し、島田蕃根について現在明らかになった事項を整理して郷土のために尽くした蕃根の業績を再認識することを目的とするものである。

一、徳山誕生と祖先・教学院

島田蕃根は文政一〇年（一八二七）二月八日、徳山の金剛山修学院で出生した。幼名を円真といい、後に徳山藩主元蕃の偏諱を賜り蕃根と改名した。また南村、如縄道人、暁華懺士、天心居士等と号した。

蕃根の家系は南朝の功臣にして聖護院に入り山伏となった島田兼長より出、後に芸州草津に住した教学院良栄のとき毛利元就の命により、始めて聖護院の末寺となった。元和五年（一六一九）に良栄の子教学院中興権

大僧都良円は、初代徳山藩主毛利就隆（発性院殿）が徳山へ分地されたとき招かれ芸州草津より徳山に移った。徳山教学院は知行一五石扶持方三人分、屋敷一ケ所を賜り、当初より官禄寺院であった。その後の家系は一世良円の後、教学院権大僧都二世良盛、同三世大円、同四世秀円、同五世円盛と続き、九世浄観（島田藍泉）の孫一一世が島田蕃根である。

蕃根は明治四十年（一九〇七）九月二日病により、八一歳で逝去した。墓石は現在東京都内の青山墓地にあり、表面に「島田蕃根之墓」、側面に「弘教院圓乗通觀大徳、明治四十年九月二日寂」と刻まれている。

二、学術と思想の特色

近世の碩学といわれた蕃根は早くから修験道に入り、一八歳には既にあらゆる群書を概ね読破し、天台宗については略成業した。その後江州の三井寺で仏教を学びまた、禅宗については大成寺の関龍に師事し、その後伊予の大隆寺の晦巖禅師のもとで研鑽を重ねた。それにより仏教各宗の要義に通じた。

また後に儒教および神道も学び、古学を修め諸子百家を極め、その造詣は衆に秀でていた。

それは蕃根が徳山藩が廃され山口藩に合併後上京、教部省に出仕した時、宗教制度の調査で他の追随を許さず卓越した力と見識を示したことや明治一三年（一八八〇）内閣の記録局、修史局を退官後神道や文学等に尽力し彼の学識を大いに示したこと、また明治一四年（一八八一）一月四日に時の参議山田顕義へ上疏した「寺院改正ノ事ヲ以テ擔任セシメン事ヲ請フ疏」等で神道、儒教、仏教に通暁した彼の学術水準の高さを知る事ができる。

蕃根は徳山藩内訌時には急進派（革新派）、保守派とは一線を画した中正な穏健派であった。

また綿服主義者であり、生涯絹の衣服は用いなかった。ここにも蕃根の思想信条の一端を知ることができる。蕃根の思想形成に影響したであろうと思われる人々の中には、文章の交わりがあった頼三樹三郎、中島棕蔭や親交のあった文学博士大内青巒、重野安繹、島地黙雷、赤松

連城等がいた。

三、徳山藩時代の業績

明治維新前に蕃根は、藩主元蕃にその能力を認められて徳山藩形勢視察使に任命され、毎年一度京阪地方に派遣された。彼はその折京阪を巡る形勢の把握や各地の志士との交流などを通じて大いに徳山藩のために尽力した。

慶応元年（一八六五）六月一七日から一八日に徳山藩では保守派を政治の要路から退陣させて当時革新派が壊滅状態であったので穏健派を政治の要路に就かせた。その折蕃根も政務座に出仕を命ぜられ、藩政に深く参与した。明治二年（一八六九）六月二六日版籍が奉還され徳山藩主元蕃は徳山藩知事を拝命した。

明治三年（一八七〇）九月一二日、徳山藩政務局は蕃根を修験職から差除き、士族に召し仕えさせ一代高五〇石を給した。また同日、蕃根は藩校興譲館の文学の部の助教に任用され、大いに功績を挙げた。また、蕃根は有福蕃愷、遠藤蕃衡等と徳山藩權大参事に任用され、藩知事をよく補佐した。特に明治四年（一八七一）五月一五日に提出した徳山藩を廃止し山口藩への合併上表運動の献策推進や徳山藩内の寺院の大改正への目途を立てる等他の權大参事と協力して藩知事をよく補佐した。徳山藩は廃藩置県の大詔が発布された日より二三日前に全国に先駆けて明治四年六月一九日山口藩に合併を仰せ付けられた。また蕃根達は、同日徳山藩權大参事を依願退官した。

四、明治時代（在東京）の業績

蕃根は明治五年（一八七二）三月一四日、神祇省が廃止され教部省が設置された時、知己の宍戸璣の推挙により上京し、教部省に大録・八等として出仕した。

蕃根はここで、宗教制度の調査では他の追随を許さない極めて卓越した力と見識を示してその本領を発揮した。明治一〇年（一八七七）一月一一日、教部省が廃止となったとき、一時官を辞したがその後明治一二年（一八七九）内務省管轄の社寺局に再出仕した。その後内閣

の記録局や修史局に出仕し令名を高めた。

蕃根は明治一三年（一八八〇）退官し、増上寺大教正行誠上人等と弘教書院を三縁山境内に設立し、神道と文学に尽力した。蕃根は日本一切経の編刷に関して大いに努力し縮刷『大蔵經』を刊行した。刊行した数は四十帙、四百十九冊、千九百四十五部、八千五百六十二巻、二十五類に分けられた浩瀚なものであった。この刊行は、仏界空前の事業であり、この『大蔵經』は世界的な大著であった。また蕃根は、森田悟由の援助を得て聖徳太子御註の「法華」「勝鬘」「維摩」の三経疏を上梓した。東京帝国大学に仏教講座が新設されたとき蕃根はこの講座を担当し、ここでもその造詣の深遠であることを認められた。

また、育児事業にも関与し、福田会育児院を設立したり、古書の再刊行をして教会を裨益した。後年京都蔵経書院が設立されるとその監修の重任を果した。

五、児玉家との交流

蕃根と児玉家の関係は深い。児玉源太郎の父半九郎と親交があり嘉永五年（一八五二）四月二五日、半九郎が島田邸の詩会に出席していた折に源太郎（幼名・百合若）は、半九郎の嫡子として出生した。蕃根は早速源太郎生誕の祝詩を賦した。安政三年（一八五六）一〇月一九日、父半九郎の死歿時には源太郎はまだ四歳と八カ月であったので、児玉家断絶を防ぐため蕃根が浅見栄三郎の次男、次郎彦をその養子に推挙した。

蕃根は先輩、また同志として畏敬していた児玉半九郎の死歿後は、半九郎の嫡子である源太郎の読書指導や精神的な訓育に努めた。殊に元治元年（一八六四）八月二〇日に義兄である次郎彦が凶刃に仆れて児玉家は家名断絶となったが、その折蕃根は「枉屈する勿れ」と源太郎を激励した。

慶応元年（一八六五）七月一三日、児玉家は家名復興の達しを受け、源太郎は新知二五石を与えられ中小姓に任ぜられた。また元服し「源太郎忠精」と名乗るようになった。児玉家家名復興には、当時政務座に出仕し、最

も深く政務に参与していた蕃根の進言によるものであった。源太郎の元服親は蕃根であるという説もある。

日露戦争終了の翌年明治三九年（一九〇六）六月九日、知己、友人、門下生の企画により蕃根八〇歳の延寿会が東京の青松禅寺で開催された。この時二百余人の参加者があったが、当時参謀総長であった児玉源太郎は時の陸相であった寺内正毅と共に、蕃根の門下生として出席した。その折源太郎は、感極まって挨拶のできなかった蕃根に代わって席上で謝礼の挨拶をした。既に記述したように蕃根と児玉家との関係は父半九郎、義兄次郎彦、源太郎と明治三九年七月二三日源太郎が病歿するまでの長期間にわたる深いものであった。

おわりに

本稿は、徳山地方郷土史研究会「平成一八年度第二回例会」で発表したものを加筆、成稿したものである。調査が不十分な点も多いが、特に蕃根の任用された役職名などは、根本史料と考えられる『徳山市史史料』に準拠し、史実としての正確性に留意した。

参考文献

(1) 徳山市史編纂委員会編
『徳山市史史料　上・中・下』徳山市役所　一九六四年

(2) 徳山市史編纂委員会編
『徳山市史年表』徳山市役所　一九六九年

(3) 都濃郡役所編『都濃郡誌』マツノ書店　一九八六年

(4) 山口県文書館編集・発行
『防長寺社由来　第七巻』　一九八六年

(5) 日本大学編集・発行
『山田伯爵家文書　巻一一』　一九九一年

註

一部の人名辞典には、島田蕃根（ばんこん）としているが、蕃根は旧徳山藩主元蕃（もとみつ）の一字を賜わったのであり、蕃根（みつね）と呼称するのが正しい。御子孫にも問合せ確認済。（『島田藍泉伝』荒木見悟）

史料紹介

富田御殿絵図

会員　西村修一

富田御殿は、徳山毛利七代藩主就馴（なりよし）の隠居所である。

専之助は寛延三年（一七五〇）二月二十四日、五代藩主広豊の十男として江戸今井谷邸に生まれた。父広豊の跡を継いだ兄の六代広寛が、明和元年（一七六四）二月に江戸藩邸にて三十二歳で亡なると、広寛に嗣子がなく、他の兄は早世あるいは他家を相続していたため、急遽兄の養子となり、四月には、十四歳で第七代徳山藩主（就馴）を襲封した。

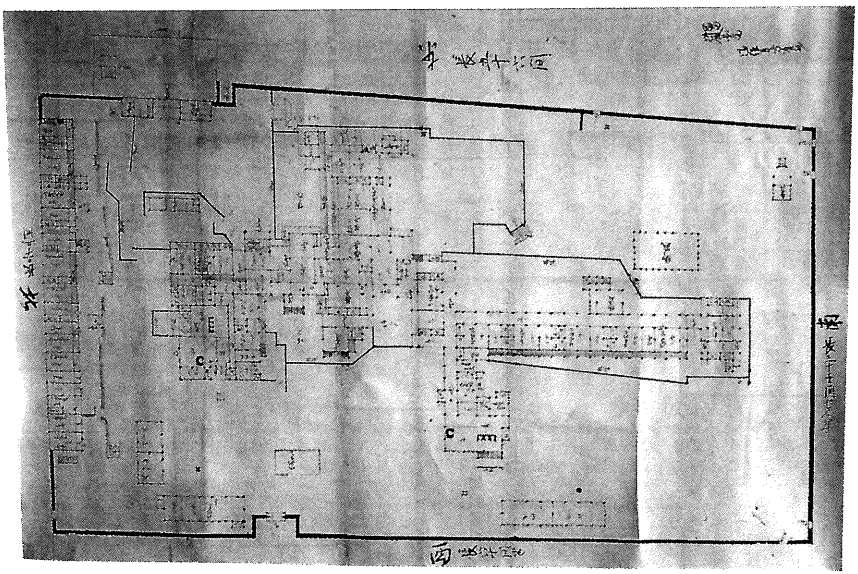
天明五年（一七八五）に藩士の文武修錬場として、支藩に先駆けて勢屯（せいだむろ）に藩校鳴鳳館を創設し、あるいは藩祖就隆及び三代元次の詩文歌類を編集せしめるなど、特に文教面に意を注いだ。その徳望は、治世三十余年の間に一人の重犯人を出さなかったことでも知られる。

寛政九年（一七九七）九月、四十七歳の就馴は家督を次男広鎮（ひろしげ）に譲り、藩政からいっさい手を引く決意で、十一年（一七九九）に富田において、隠居所の築営に取り掛かった。

富田御殿の建設が完了するまでの間、富田村土井の四熊久左衛門宅・屋敷地および建咲院隠居敷地を借り上げ、仮御殿とすることにした。

仮御殿での生活は六年にわたった。その間に二人の御子が誕生したが、夭折した。

仮御殿にほど近い茶の木原の地に、かねて建立中であった富田御殿の大殿様御座所が完成し、文化元年（一



富田御殿絵図（林　崇文氏蔵）（『新南陽市史』口絵カラー）

八〇四）二月七日、大殿様が正式に入居された。

隠居中の出来事として、百姓らの水争いの仲裁に入り、用水路の中ほどに大石を置いて水を分けたという大岡裁きのような、〝殿様石〟の話が伝わっている。

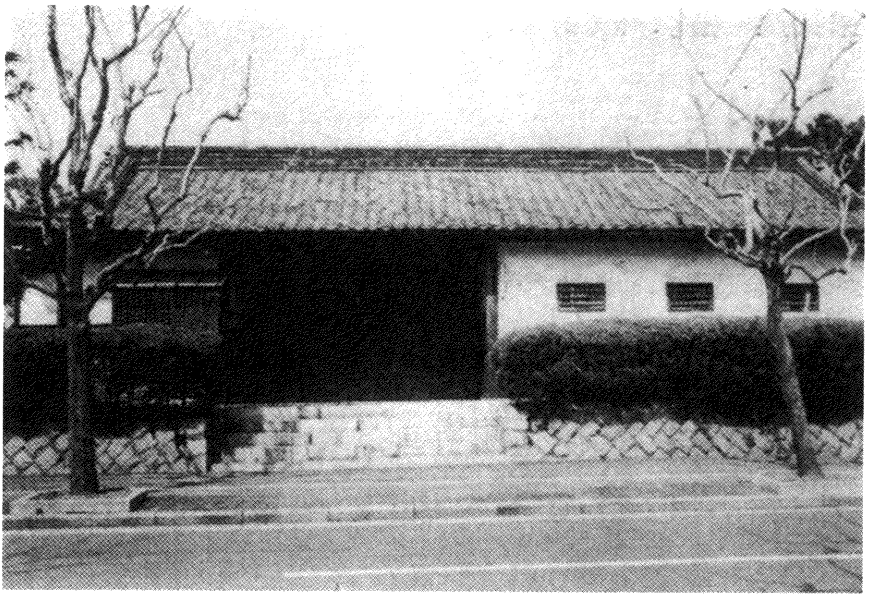
富田御殿のある茶の木原は政所（まどころ）の北部にあたり、土井の仮御殿にほど遠くない場所である。御殿前には政所から鹿野へ至る道が南北に通っていた。

御殿の一部を移築したと伝えられる徳山の佐藤家長屋門は、かつて県総合庁舎の南辺にあったが、現在は解体保存されている。同じく富田平野の林家邸宅は、総屋久杉で張られた天井を持つ見事なもので、当時の様子をしのぶことができる。

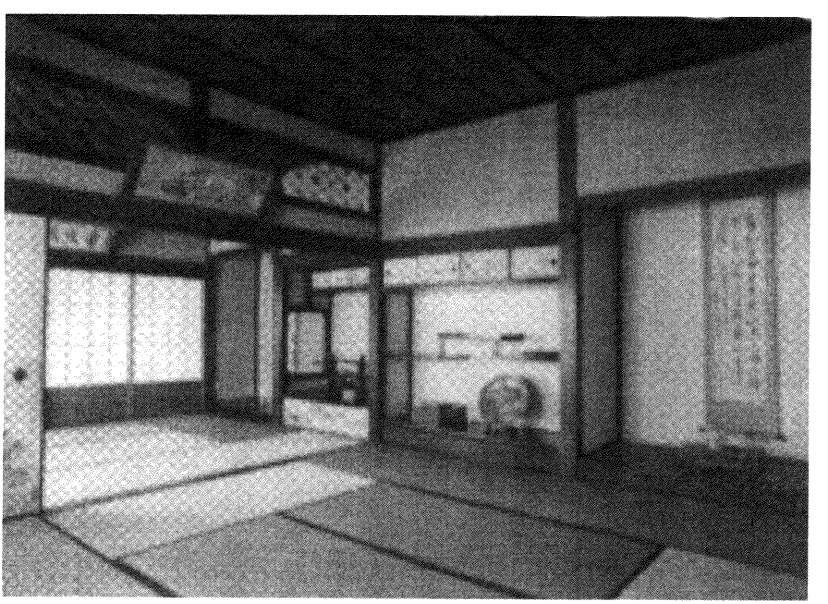
注）徳山の佐藤家長屋門と富田の林家邸宅のカラー写真は、周南市美術博物館郷土史コーナーのパソコン内で見ることができる。

就馴は文政十一年（一八二八）三月、七十九歳で死去するまでの約二四年間を富田御殿で過ごした。

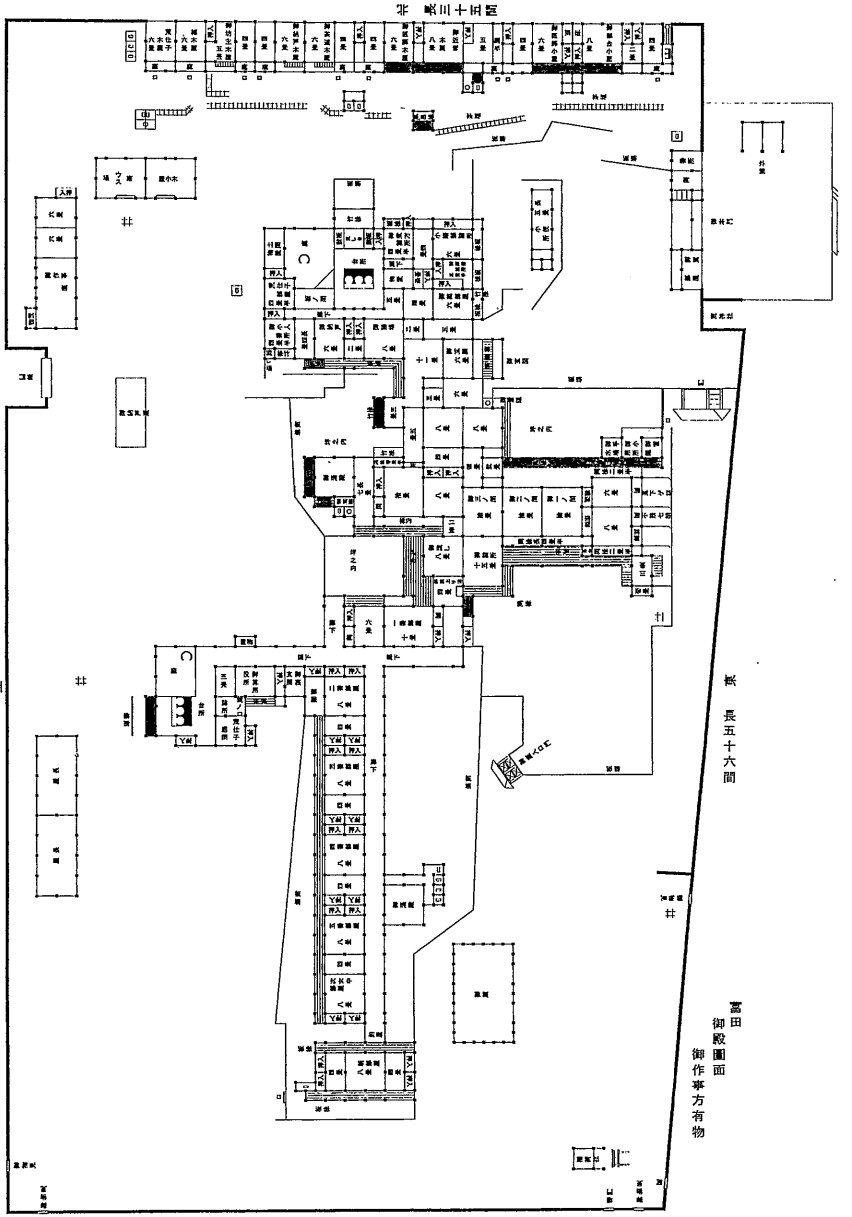
富田御殿のだいたいの位置は予想できるものの、発掘



かつて毛利町にあった佐藤家長屋門　©周南市教委



平野の林家邸宅　©周南市美術博物館



©周南市教委

調査されていないため、詳しい場所は特定されていない。

林家に伝わる富田御殿絵図のコピーを手にした私は、なんとか皆さんの前に展示できる形にしたいと考えていた。すぐに大下弘司さんと富田御殿現代語版絵図作成のプロジェクトを開始した。

残念なことに、古文書の力がなくて古書体が判然としない。徳山地方郷土史研究会理事の金谷一夫さんにお願いした。中には意味不明のものがあったが、ほとんどを金谷さんは解析された。

大下さんの後を受けた與志園愼二さんと見取り図に一枚一枚現代語を貼り付けるという作業をしていった。平成十七年に完成をみて、同年五月の「まどころ来てみん祭」（富田風車通り徳本工務店）にて、A1版光沢紙仕様パネルで初お目見えさせることができた。

少し遅れて、独自に作業を進めていた大下さんは、息子さん（宣昌さん）の協力を得て、パソコン入力されたきれいな絵図を完成させた。

周南市新南陽民俗資料展示室にて平成十七年より展示していたが、すぐに大下版に差し替えた。

参考文献

『新南陽市史』　新南陽市　一九八五年

『徳山市史（上）』　徳山市　一九八四年

『周南風土記』　文芸社　小川　宣　二〇〇六年

『周南地方歴史物語』　瀬戸内出版　清木　素、小川　宣　他　一九八〇年

『新南陽の民話と伝説』　新南陽市教委　一九七三年